

芭蕉・一茶を介しての捕虜体験
 ——リチャード・フラナガンの『おくのほそ道』

The Australian POWs' Experiences Depicted in Connection with
 Basho and Issa:
 Richard Flanagan's *The Narrow Road to the Deep North*

田中 英史
 TANAKA Hidebumi

Abstract: The Australian author Richard Flanagan's 6th novel, *The Narrow Road to the Deep North* (2013), which was awarded the 2014 Man Booker Prize, deals with the Australian POWs' dire experiences under the Japanese military in Siam during World War II. The protagonist Dorrigo Evans, an Australian medical officer (colonel), is forced, together with about a thousand Australian POWs nominally under his command, to work for the construction of the Thai-Siam Railroad and suffers inexpressively painful conditions—physical and mental. He comes to realize that the essence of our lives is suffering and cannot free himself of this realization of the basic absurdity of the universe even after he comes home and is hailed as something of a national hero after the war.

The novel makes use of the technique of the epigraph rather systematically: at the beginning of each of the five parts which comprise the work, a haiku poem by either Matsuo Basho or Kobayashi Issa is employed as an epigraph. The work, therefore, together with the adoption of the title of Basho's classical work as its own title, may seem to be basically sympathetic with the Japanese way of thinking, but in actuality it reveals a more subtle and tragic attitude toward the usefulness of literary sensibility, including that of traditional Japan, in confrontation of the suffering which is inherent to the universe. This interpretation may be justified by the epigraph of the entire novel: a line from Paul Celan—"Mother, they write poems," in which "they" must mean the Nazis people.

Key words: World War II, Australian POWs, forced labour, suffering, absurdity, epigraph, Basho, Issa, Paul Celan, literary sensibility-

第2次大戦、オーストラリア人捕虜、強制労働、悲惨、不条理、エピグラフ、芭蕉、一茶、ポール・ツェラン、文学的感性

1 はじめに

リチャード・フラナガン (Richard Flanagan, 1961—) の2014年マン・ブッカー賞受賞作『おくのほそ道』(*The Narrow Road to the Deep North*, 2013) の題名は、芭蕉の代表作のそれを踏襲したものである。そのことからしても特にわれわれ日本人の関心を引く。

作者フラナガンはオーストラリアのタスマニア出身。ジャーナリズムや映画関係の仕事もしているが、主たる仕事としての長編小説は6編出している。『河川案内人の死』(*Death of a River Guide*, 1994)、『片手拍手の音』(*The Sound of One Hand Clapping*, 1997)、『グールド魚類画帖——十二の魚をめぐる小説』(*Gould's Book of Fish: A Novel in 12 Fish*, 2001)、『隠されたテロリスト』(*The Unknown Terrorist*, 2006)、『欠乏』(*Wanting*, 2008) とこの『おくのほそ道』である。全体として多彩な題材と手法が見られるが、その中でこの『おくのほそ道』は日本に直接関連した題材を扱い、芭蕉・一茶をはじめとして日本文学・文化を援用しているという特徴を持つ。本論文ではそのあたりの実情を見てみたい。

2 不条理の極限

本作ではフラッシュバックの手法が多用されていて、物語の時間がたびたび大きく前後し、うっかりすると紛らわしいが、全体として主人公ドリゴ・エヴァンズ (Dorrigo Evans) の一代記の形になっている。主要な柱は、第2次大戦中に日本軍の捕虜として彼がなめた悲愴きわまりない経験。副筋として彼の恋人との関係が語られる。

主人公ドリゴはオーストラリアのタスマニア出身(その点作者と同じ)の軍医大佐。日本軍の捕虜として、シャム(タイの旧称)で1千人の部下とともに鉄道建設の強制労働に従事させられる。

捕虜収容所での日々の生は肉体的苦痛の極限である。食糧不足、病気蔓延、重労働、雨期の猛烈な雨といった状況のもと、毎日何人も捕虜が死んでいく。そうした中ではとにかくその日を生き残ることが焦眉の課題である。こんな思いをしても生きなければならぬのかという疑念が当然湧く。生の不条理の極限が描かれている。

捕虜たちが駆り出された日本軍の鉄道建設は、かの泰緬鉄道(タイービルマ間)のことである。(作品題名の『おくのほそ道』は第一着的にはこの鉄道を意味しているのであろう。)これは日本軍がルマへの陸上輸送路を確保し、ひいては「インパール作戦」援助のために企てられたものだった。インド東北部の要衝インパールの奪取をめざしたこの作戦は、その後、「日本陸軍史を通じて最大の愚戦悪闘」(高木俊朗)と評されるようになっていく(注1)が、結局、大失敗の結果、日本兵士の死骸累々たる「白骨街道」を生み出すことになる。また鉄道建設のほうも、条件を無視した無謀な実行により、開通は一部にとどまり、「死の鉄路」(the Death Railway)と呼ばれるに至った。ドリゴが晩年に書いた文章によれば、シンガポール陥落の際、捕虜になったオーストラリア軍は2万2千、うち9千人が鉄道建設に動員され、そのうち3分の1が命を落とした。それを含めて駆り出された連合軍捕虜は約6万人。そのほかに25万人かそれ以上のタミール人、中国人、ジャヴァ人、マレー

人、タイ人、ビルマ人が動員され、その死者は5万とも10万とも20万とも(24—25頁)。(ドリゴの挙げるこれらの数字は、現在でも公式に確定されていないものが多いようであるが、大筋ははずしていないと思われる。)

この鉄道建設の企ては、日本軍の中では、究極的には、大和魂 (the Japanese spirit) の実現であり、至高の天皇の意思に基づくものとされていた。しかしそうした論理が捕虜たちに納得されるはずもなく、意義の分からない強制重労働は彼らの不条理感を強めることになる。彼らにとってまわりは「理解不能、伝達不能、了解不能、見分け不能、描写不能」(26—27頁)なものに溢れていると見えた。

捕虜たちの苦難は、もちろん根本的には戦争という究極の不条理によって引き起こされたものである。しかしこの作品は戦争批判の視点を特にあからさまに出すのではなく、捕虜たちの経験する悲惨を具体的に綿密に描いてゆく。まさに文学本来の仕事をおこなっていると言ってよかろう。衝撃的なエピソードは数多いが、もともと屈強な兵士だったダーキー・ガーディナー軍曹が衰弱の末、日本軍の虐待にさらされ、便所の中で溺れ死ぬに至る経過(第3部)や、壊疽にかかった兵士ジャック・レインボウが、医療器具や薬品の絶対的欠如の中、ドリゴによる手術の3回目について命を落とす(第3部第17—18章)件などが強い印象を残す。

捕虜を支配する日本軍側も、補給のほとんど途絶えた前線にあつて、尋常でない苦しみを味わっている。例えば収容所長のテンジ・ナカムラ (Tenji Nakamura) 少佐はマダニに悩まされ、ヒロポン中毒になっているが、そのヒロポンもほとんど入手できなくなっているように描かれる。

捕虜収容所についてのこれらの叙述は、作者の父親が実際にした経験に基づいているらしい。父君は収容所では 335 という番号をつけられていたのであろう。この作品には“*For prisoner san byaku san jugo (335)*”という献辞が置かれている。

また E. E. ダンロップの『ウェアリー・ダンロップの戦争日記——ジャワおよびビルマタイ鉄道 1942—1945』という今ではペンギン叢書に入っている大部な本も広く知られているようだから、フラナガンはこれなども参考にしたのではなかろうか。この E. E. ダンロップという人物は、1907年オーストラリアのビクトリア州に生まれて医学を修め、第2次大戦ではジャワで第1連合軍総合病院の運営に当たりながら日本軍の捕虜となった。戦後帰国してからは王立メルボルン病院の初代名誉外科医に任命されたのを始めとして多くの顕職についた。経歴その他、ドリゴと重なり合うところが多い。

ドリゴには英雄的なところがある。捕虜たちの指揮官として、日本軍の暴虐から部下をかばおうとし、理不尽な要求に毅然として対するなど。自己を律する力も強い。牛肉が手に入った稀な機会に、自分の分を取ることを我慢して、病人に回せという命令を貫き通すなど。部下たちからは「大人」(“Big Fella”)と渾名されて尊敬を集めるのだが、自分ではそういう評価にふさわしい人間ではないという自覚があり、周囲の評判を重荷に感じている。しかしヒロイックなところがあることは確かであつて、彼が一生を通じてアルフレッド・テニソンの「ユリシーズ」(Ulysses)を愛唱し続

けるという設定は、そうした彼の性格づけに大きく寄与している。彼が瀕死の床で朦朧とした意識の中、口ずさむのも

わがめざすは
 日役のかなた
 あらゆる西方の星々の湯浴みするところを超えて
 命のかぎり航海し行くことなれば

といった詩行である（442 頁）が、ユリシーズの年老いてなお烈々たる探究心と冒険心を、ドリゴも共有している。

ドリゴには、この「ユリシーズ」に限らず、書物なしにはいられないというところがある。「彼は本というものにはオーラがあって、それが自分を守ってくれており、身边に何か一冊なければ自分は死んでしまうだろうと思いついていた。彼は寝るときに女なしでも一向にかまわなかった。しかし本なしで寝たことはなかった。」（二八頁）主人公のこういう本好きという性格設定が、エピグラフの重用と響き合って、作品全体の姿勢を大きく決定していることはもちろんである

そしてドリゴは晩年、捕虜体験をふりかえって次のように書いている。「悲慘は本の中には形式と意味を与えられて取り入れられる。しかし実人生においては悲慘には形式もなければ意味もない。悲慘はただあるだけだ。そして悲慘が支配しているあいだは、宇宙にはほかのものは何も存在し得ない。」（23 頁）そのようにあらゆる理屈を拒絶する悲慘——それが捕虜体験に対する、また生全般に対する、ドリゴの最終的な認識であった。

3 エピグラフの働き

エピグラフの使用は古来ごく普通に行われている技法であるが、本作品ではそれが特に目につく。五部から成るこの作品は、作品全体に対してと各部冒頭にそれぞれエピグラフが置かれており、その構成意識は几帳面な感じを与えるほどである。それらのエピグラフをあらかじめまとめて示しておく——

作品全体	Mother, they write poems./ <i>Paul Celan</i>
第1部	A bee /stagger/ out of the peony./ <i>Basho</i>
第2部	From that woman/on the beach, dusk pours out/across the evening waves./ <i>Issa</i>
第3部	A world of dew/and within every dewdrop/a world of struggle. / <i>Issa</i>
第4部	The world of dew/is only a world of dew---/and yet. / <i>Issa</i>
第5部	In this world/we walk on the roof of hell/gazing at flowers. / <i>Issa</i>

である。第1部から第5部を通して使われているのはいずれも芭蕉あるいは一茶の句である。原典

と思われるのは、それぞれ「牡丹麩深く分出る蜂の名残哉」（第1部）、「女から先へかすむぞ汐干がた」（第2部）、「露の世の露の中にてけんくわ哉」（第3部）、「露の世は露の世ながらさりながら」（第4部）、「世の中は地獄の上の花見哉」（第5部）である。（フラナガンはこれらの句をどの英訳版で見たのだろうか。原典にさかのぼっての理解はどの程度だったのだろうか。彼はタスマニア大学卒、のちにはオックスフォード大学ウスター・コレッジで修士号を取っているが、そのいずれでも歴史学専攻で、特に日本語や日本文学に通じていたとは伝えられていない。）

ともあれ、当然のことながら、どのエピグラフも各部の内容を巧みに予示している。例えば第4部のエピグラフは一茶の「露の世は露の世ながらさりながら」（『おらが春』）だった。一茶 57 歳の 1819 年、長女さと女が生後 400 日で死んだときの作。長男、長女、次男、三男いずれも夭折。すでに前前年、長男 1 周忌の折（？）には「露の世は得心ながらさりながら」と詠んでもいた。晩婚（52 歳で初めて結婚）の一茶にとって、わが子の連続する夭折は、その間に起きた最初の妻の若死にも含めて、不条理の極みと思われただろう（注2）。第3部のエピグラフ「露の世の露の中にてけんくわ哉」と第5部のエピグラフ「世の中は地獄の上の花見哉」も、人間の生は究極的に不条理性を免れ得ないという一茶の根本認識をよく示し、フラナガン作品全体のメッセージに直結する。

ところで、本文中で芭蕉が初めて大きく登場するのは第2部第16章である。捕虜収容所長ナカムラ少佐とその上官のコタ（Kota）大佐が茶を飲みながらよもやまの談話を交わしていて、コタが中国で行った中国人捕虜の斬首の経験を語るなどのことがある。そしてふたりは、この鉄道建設も戦争自体も、その意義はそれだけにとどまるのではなく、究極的には日本人の優越性をヨーロッパ人に知らしめるところにあるという認識で一致する。そのときコタがふと口ずさむのが”Even in Kyoto/when I hear the cuckoo/I long for Kyoto.”（京にても京なつかしやほととぎす）という句であった。ナカムラはすぐにそれを芭蕉と分かり、その後ふたりは日本の古典文学への趣味を共有することを確認し合って、一茶や蕪村や芭蕉を語り合い、ますます意気投合する。『おくのほそ道』こそは”the Japanese spirit”の精髓を表わした一書だというのがコタの意見であるが、この”the Japanese spirit”（日本精神）はコタのもとの言葉では「大和心」あるいは「大和魂」だったのであろうか。だとすれば、この「大和心」は例えばその代表的表出例としてよく引かれる本居宣長の「敷島の大和心を人間はば朝日に匂ふ山桜花」よりも微妙な陰影に富んでいる感じがしないでもない。コタ、ナカムラ両人はそれだけ繊細な文学的感性を賦与されていることになる。しかし芭蕉への感激は、ナカムラの心中ではすぐにこの鉄道建設の意義や八紘一宇の思想に直結されていくように描かれていて、その点はドリゴやこの作品の観点からは納得できないものとされているのであろう。コタとナカムラのこの談話のシーンは、コタが芭蕉をもじって、”Even in Manchukuo/when I see a neck/I long for Manchukuo”（満州にても満州なつかし首見れば（？））という句を吟じて去って行くところで閉じられる。ここには作者の皮肉な目がはっきりとうかがわれると言えようか。芭蕉や一茶を基本的には肯定していないと言っていいだろうか。

そもそもこの作品には、作品全体に対するエピグラフもつけられ、それにはパウロ・ツェランの

「母さん、あの連中も詩を書くんだよ」(“Mother, they write poems.”)が使われているのだった。ツェラン(1920-70)はナチスの強制労働にも駆り出された経験を持つユダヤ系詩人。この文句は彼の詩‘Wolfsbein’(「トリカブト」)に出てくるのだが、ここで「あの連中」とはその残虐なナチスを指すと思われる。少なくともフラナガンはそのような意味でこれを使用しているのであろう。残虐性と詩心が併存する人間性の矛盾を簡潔に剔抉するこの句を作品全体のエピグラフとして採用していることは、構成上、そこに作者フラナガンの根本的認識を表わしていることが妥当であろう。各部のエピグラフにいったん結晶された形の芭蕉・一茶流の諦観・世界観も、もうひとつ上のレベルからの批判を受けているわけである。すなわち、人間と生の不条理性は、これほどまでも徹底していて救いが無いものなのだ。

4 戦後の変転

上に述べたように、本作の時間の流れは錯綜しているが、全体のプロットを大づかみに言うと、戦時の捕虜収容所のできごとが前半に描かれ、諸人物の戦後の運命が後半で取り上げられて、その両方が響き合い、作品の根本的メッセージを構成することになる。

この小説は人物たちの戦後の運命の多様さにも筆を進め、特に捕虜収容所関係の日本側主要登場人物3人——所長のナカムラ少佐、その上官のコタ大佐、「オオトカゲ」(“Goanna”)と渾名される朝鮮出身の捕虜監視員(本名 Choi Sang-min)——の運命の対照は痛烈な皮肉の効果をかもし出す。

ナカムラ少佐、コタ大佐はいずれも戦犯としての訴追を免れるが、ナカムラ少佐は日本へ引き揚げたあと、戦犯訴追を恐れてキムラと名前を変えるなどの工夫をし、戦後の新宿のどさくさの中で殺人を犯すなりゆきにもなるが、特に逮捕されることもない。知り合った看護婦のイクコ・カワバタと結婚し、コタ大佐の口利きで日本血液銀行に就職したりして、社会の中にすんなりと融け込んでいく。晩年には喉頭癌にかかるが、妻の良さと自分の人間の良さにますます気づくという変化が皮肉なタッチで描かれる。

コタ大佐の帰国後はあまり詳しくは描かれないが、105歳の長寿を保ち、最後はミイラとなって発見されることが書かれる。そして死した彼のベッド脇の卓上には芭蕉の『おくのほそ道』がおかれ、枯草のしおりの挟まれていたのは冒頭の「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。」の箇所であった。

これらふたりの高級将校は無事帰国し、その後もほぼ恵まれた人生を全うしたと言えるが、軍の末端に位置する朝鮮出身の捕虜監視員チョイ・サンミンは現地でBC級戦犯の罪に問われ、絞首刑に処せられる。現によくあったとされる事例のひとつである。

主人公ドリゴは帰国後エラ(Ella)と結婚して3人の子供をもうけるが、戦争体験の影響もあってその結婚生活になじみきれず、最晩年に至るまで女漁りの癖を脱しきれない。そのドリゴの女性関係——特に恋人エイミ(Amy)との——がこの小説の副筋をなすものとして重要である

ドリゴは1940年、27歳のとき、アデレードで軍医としての最終研修を受けているあいだに、町

の本屋で彼女と出会い、恋に落ちる。許嫁に近い関係になっていたエラがいたのだったが。すぐあとでドリゴは彼女が叔父の若い（24歳）妻であることを知るが、ふたりはその叔父の目を盗んで熱い逢い引きを重ねる。初めて一夜をともにしたあと、ドリゴは「何も起こったわけではない。しかしそれですべてが変わってしまった」(Nothing had happened, yet everything had changed.) と思い、また「何も起こったわけではない。しかし何かが始まったことは分かった」(Nothing had happened, yet he knew something had begun.) (108頁) という感慨を持つ。そうした運命的な恋であるにもかかわらず、その発展はドリゴの出征によって妨げられる。何か月も音信不通が続く状況の中で、捕虜収容所のドリゴは、エラからの手紙により、アデレイドで叔父の経営していたホテルが火災を起こし、エイミもその事故で死んだらしいことを知らされる。生の不条理のもうひとつの例としてのこの知らせはドリゴを打ちのめし、彼は内面に大きな空虚を抱えて、それを一生克服できずに終わることになる。直接には戦争が原因となっているとしても、生一般の根本に存在する不条理の著しい一例である。また作品の最終章で、エラが戦地のドリゴに送ったエイミの死のニュースは実はうそであった——「エラが彼についた唯一のうそ」(the only lie Ella ever told him) (446頁) ——ことがさりげなく明かされて、ドリゴにおける生の不条理さを印象づける最後のストロークになっている。生の不条理さは、戦争のような大きなスケールのものによってばかりでなくこうした個人的な行為によっても生み出されるのだ。

さらにつけ加えるならば、天災の類いも人間にとっては不条理である。戦後何年か経って、タスマニアでドリゴの妻子が山火事に襲われ、車で必死に駆けつけたドリゴによって危うく救い出されるというエピソードがある。(第5部、第11—12章) (山火事という災害を取り上げたところには、森林保護運動にも熱心だという作者の一面が表われているのかもしれない。) この偶然のできごとによって、ドリゴがいささか家族に対する意識を取り戻すように描かれているのは、生の不条理に通ずる「生のアイロニー」と言えるのではなからうか。

ところで、芭蕉、一茶と並んで重要な役回りを与えられているのが18世紀の俳人というシスイ(Shisui)である。晩年にドリゴは、戦争犯罪の謝罪のためにオーストラリアを訪れていた日本の女性グループから日本の文人たちの辞世の句を集めた本を贈られていたが、ある日その中にシスイの例を見つけて感銘を受ける。シスイは死に臨んで辞世の句を求められたとき、筆をつかんで円を描いて弟子たちを驚かせたというのである(27—28頁)。その円の形が本作品でも28頁に示されていて、本書唯一の図形であるだけに目を引く。シスイは1769年に44歳で死んだという之水のことらしい。あまり知られていない人物であるが、Yoel Hoffmann (ed.), *Japanese Death Poems: Written by Zen Monks and Haiku Poets on the Verge of Death* (Tuttle, 1986) にこの「辞世の句」が出てくる(注3)。ドリゴが贈られたという本もこのホフマン編の書に基づいているようである。その筆の一筆書きによる円の形はホフマン編では左肩から右回りなのだが小説では右肩から左回りになっているが、元の形を全くそのまま採用するのを避けようとの意識からであろうか。いずれにせよこのシスイも純粋にフラナガンの創作ではなさそうである。この之水の辞世の句からドリゴ

が受けた感銘は、彼の最終的な悟りに近いものとして、次のように書かれている。「之水の辞世の句はドリゴ・エヴァンズの潜在意識の中で鳴り響いた。内容の詰まった空虚、終わりのない神秘、長さを欠いた幅、大いなる輪、永遠の回帰——線の対照たる円。」(28頁)

晩年には功成り名遂げた形のドリゴであるが、その最期はアイロニックと言わざるを得ない。彼が命を落とす直接のきっかけになったのは、交通事故に巻き込まれたことだった。深夜の街で車を運転中、警察に追われて信号無視の暴走をした酔った若者たちの車に衝突されたのだが、読者にとってはあっけない、思いがけぬ不幸であった。その若者たちの車が盗んだスバル・インプレッサという日本車であったというのも、この作品にあってはアイロニーの上塗りであると読める。

上に見た之水の辞世の句(円)は、この小説の結末近くでもう一度言及される。ドリゴは、息を引き取る間際、混濁する意識の中で、自分が“void”(空)になりつつあるのを感じて、之水の円のイメージ——その形が小説ではもう一度示される——を思い出し、その意味が分かったと思う(444頁)。円はドリゴにとってはゼロでもあったろう。瀕死のドリゴはその円が表わす「空虚に自分がなりつつあるのを感じ、そしてついに彼はその意味を悟った。……彼は自分の首の周りを輪が締め付けるのを感じた。彼は息を切らし、片脚をベッドの外に投げ出した。脚はそのまま1、2秒痙攣してベッドの鉄枠にぶつかり、そして彼は死んだ。」(444頁) このように、ドリゴの最期と彼がそのとき得る「悟り」の描写は荒涼としていて、あまりポジティブな意味は感じられない。とする之水の「悟り」に対する作者の最終的あるいは根本的な評価も、芭蕉・一茶に対するそれと同じく、全面的な是認ということにはならないと言ふべきか。

5 おわりに

かくてこの作品は全体として、人間の生は不条理と切り離せないという認識を提出し、その不条理の実態を克明に描き出しているのである。——と整理してしまえば平凡に響くかもしれないが、これはまさに文学のオーソドックスな仕事である。その叙述の具体的な迫力が本作品の価値を構成する主要素になっていると評価できよう。

同じく泰緬鉄道建設を題材にした映画にデヴィッド・リーン監督の「戦場にかかる橋」(1957)があった。同様な時期、地域での日本兵の体験を描いた日本の文学作品に、古くは例えば竹山道雄『ビルマの竖琴』(1948)があったが、ごく最近でも古処誠二『中尉』(2014)や高橋弘希『指の骨』(2015)が話題を呼んでいる。当時のあれだけの大きな、また悲惨な、経験は、今もって新たに作家の想像力をかきたてるところがあるのもあろう。その中において本作は、捕虜の立場を中心にしながらも日本軍側にもかなり目を配っている点、また戦中の事件のみならず戦後の変転にも注目して両者の対照を描き出すことを旨としている点などで、スケールが大きく、重層性に富んだ作品になっていると言えそうである。

使用テキスト

Richard Flanagan, *The Narrow Road to the Deep North* (Chatto & Windus, 2014)

注

- (1) 秦郁彦『実録太平洋戦争——六大決戦、なぜ日本は敗れたか——』（光風社出版、1995）、86 頁。
- (2) 暉峻康隆・川島つゆ（校注）『蕪村集 一茶集』（「日本古典文学大系 58」岩波書店、1959）、306、462 頁。
- (3) Yoel Hoffmann (ed.), *Japanese Death Poems: Written by Zen Monks and Haiku Poets on the Verge of Death* (Tuttle, 1986), pp. 294-95.

参考文献

Celan, Paul. *Selected Poems and Prose of Paul Celan* (translated by John Felstiner) (W. W. Norton, 2001)

Celan, Paul (中村朝子訳)『パウル・ツェラン全詩集(全3巻)』（青土社、1993）

Dunlop, E. E. *The War Diaries of Weary Dunlop: Java and the Burma-Thailand Railway*

1942-1945 (Thomas Nelson Australia, 1986; Penguin Books, 1990) ダンロップ, E. E.

(河内賢隆・山口晃一(訳))『ウェアリー・ダンロップの戦争日記——ジャワおよびビルマ
ータイ鉄道 1942—1945』(而立書房、1997)

Granquist, Charles. *A Long Way Home: One POW's Story of Escape and Evasion during World War II* (Big Sky Publishing, 2010)

林譲治『太平洋戦争のロジスティクス——日本軍は兵站補給を軽視したか』（学研パブリッシング、2013）

飯吉光夫『パウル・ツェラン』（小沢書店、1990）

古処誠二『中尉』（角川書店、2014）

イ・ハンネ

李鶴来『韓国人元 BC 級戦犯の訴え——何のために、誰のために』（梨の木舎、2016）

Lory, Hillis. *Japan's Military Masters: The Army in Japanese Life* (1943) ローリー,
ヒリス (内山秀夫訳)『帝国日本陸軍』（日本経済評論社、2002）

松尾靖秋・金子兜太・矢羽勝幸（編）『一茶事典』（おうふう、1995）

中村俊定（監修）『芭蕉事典』（春秋社、1978）

小田部雄次・林博史・山田朗『キーワード・日本の戦争犯罪』（雄山閣、1995）

杉浦正一郎・宮本三郎・荻野清（校注）『芭蕉文集』（「日本古典文学大系 46」岩波書店、1959）

高橋弘希『指の骨』（新潮社、2015）

竹山道雄『ビルマの豎琴』（1948; 新潮文庫、1959）

Towle, Philip; Kosuge, Margaret & Kibata, Yoichi (eds.), *Japanese Prisoners of War*
(Hambledon and London, 2000)

牛村圭『「戦争責任」論の真実——戦後日本の知的怠慢を断ず』（PHP 研究所、2006）

内海愛子『朝鮮人 BC 級戦犯の記録』（岩波書店、2015）

吉田裕『アジア・太平洋戦争』（岩波新書、2007）

Web サイト http://en.wikipedia.org/wiki/Richard_Flanagan (2015. 1. 6)

（20 世紀英文学研究会第 11 論集『21 世紀の英語文学』（2017 年 5 月）から転載。いくつかの修正を加えた。）